

京都大學人文科學研究所の前身と 中國典籍日本古寫本

——寫本の複製を中心に*

永田知之

一、はじめに

十九世紀の中頃に編纂が始まった『經籍訪古志』が著録する漢籍には、古寫本も多く含まれる¹。これを一つの嚆矢として、漢籍の古寫本を扱う論著は、同書から太平洋戦争中までに限っても、相當な量が生み出されてきた。小論と直接に関わる京都の學術界は、その一大中心だったと言って過言ではない。表題に掲げたような事柄を論じるには、本來は前近代に遡る研究史をよく踏まえる必要がある。だが遺憾ながら、筆者にかかる用意は無い。ここでは勤務先の前身（東方文化學院京都研究所・東方文化研究所）で進められた當該の寫本類に関する活動—特にそれらの複製について—雜駁な文章を草し、博雅の指教を仰ぎたい。

二、『東方文化叢書』と東方文化學院京都研究所

東方文化學院（創立は1929年）は中國を中心とする東洋を対象とした研究機關で、東京・京都にそれぞれ研究所が設けられた²。學院の事業は多岐に渉るが、古書の複製は主な企劃の一つであり、『東方文化叢書』はその早い成果だった。こう書くと、奥付に發行者の住所として東京研究所の所在地のみが記される同叢書と

*小論は日本學術振興會科學研究費補助金「中國典籍日本古寫本の研究」（基盤研究A、研究代表者：高田時雄京都大學名譽教授）による研究成果の一部である。なお小論の簡略版は『中國典籍日本古寫本の研究 Newsletter』IV（2018年1月）に同じ表題で掲載されている。

¹標點本に『經籍訪古志』（2014）がある。

²所謂「東方文化事業」とその據點となった研究所の沿革を知る上で参照した文獻として、ひとまず京都大學人文科學研究所（1979）、山根幸夫（2005）を挙げておきたい。

京都研究所との間に何の関係があるか、という疑問が呈せられるかもしれない。しかし、事はそう簡単には片付けられない。

影印本とは別個に販賣されたそれらの解説を除く『東方文化叢書』九點の中に、中國典籍（文書や日本人の編纂物を含む）日本古寫本の複製物は、六點を見出せる。うち京都研究所の評議員（研究員・助手の指導に当たる）であった湖南こと内藤虎次郎（1866～1934）の舊文³を収める『唐過所』の解説には「湖南博士が智證大師將來の「唐過所」を實査せらるゝや、直にこれを學界に紹介し、またこれを國寶指定に提案せられたり。本學院に於ての複製も、またその撰擇に係るものなり」との附記が見える⁴。内藤は昭和五年（1930）十一月九日の京都研究所開所記念講演會でも、「支那の古文書特に過所に就て」と題してこの文書を扱った⁵。京都研究所の學者が影印する寫本の選擇に関わったであろう例は、他にもある。

即ち『莊子雜篇』⁶が、それである。同書には京都研究所の初代主事（所長）だった狩野直喜（1868～1947）による校勘記⁷が別にあって、やはり『東方文化叢書』に收められる。その執筆は、東京研究所からの委囑による⁸。だが、高山寺所藏の舊鈔本と『莊子』の刊本などを對照したこの校勘記の序に、「又得我友武内教授（義雄）校語、遂能成此編、附於景本」⁹とあるのを見れば、複製の對象を選ぶ際に狩野自らが關與した可能性が想像される。そう考えるのは、「『莊子』の古寫本を見られるなんてことは、ちょっと當時、誰も氣のつかない、なかなか容易なことじゃなかった」と神田喜一郎（1897～1984）が評する大正前期に、武内義雄（1886～1966）は高山寺本の『莊子』を寄託されていた京都帝室博物館で實見し、同寫本の價値に氣付いていたからである¹⁰。武内は京都帝國大學文科大學で内藤及び狩野の薰陶を受けた學者だが、大正七年（1918）に早くも高山寺本『莊子』をも用いた論文を發表している¹¹。高山寺本『莊子』が學界でほぼ無名だった中、受業生の武内から示唆を得た狩野が、同書の影印を『東方文化叢書』に加えるという事態があっても不思議ではない。

³内藤虎次郎（1970）615-631頁。

⁴唐過所（1935）に附す「國寶唐過所解説」。

⁵東方學報（1931a）300-303頁。

⁶莊子雜篇（1930）。

⁷舊鈔卷子本莊子殘卷校勘記（1932）。

⁸東方學報（1931b）233頁。『東方學報（東京）』の第4冊（1933年）を除く第6冊（1936年）までの「彙報」を見れば、『東方文化叢書』の編纂に係る概容は把握できる。

⁹舊鈔卷子本莊子殘卷校勘記（1932）巻首「舊鈔卷子本莊子殘卷校勘記序」。また狩野直喜（1980）530頁にも見える。

¹⁰東方學會（2000a）196頁。

¹¹武内義雄（1978）241、247-249頁に高山寺本『莊子』への言及が見える。

そもそも『東方文化叢書』では、『文鏡秘府論』の影印本¹²が最初の一冊として世に出た。東京研究所は、内藤に解説（別に刊行を予定）の執筆を依頼していたが、遷延した後、彼の逝去に至った。續いて、同じ京都研究所の評議員だった鈴木虎雄（1878～1963）に委嘱したが¹³、學院の改組やそれに伴う古書複製事業の廃止（1938年）のためか、解説は公刊されなかった。内藤には空海（『文鏡秘府論』の編者）を扱った講演、鈴木には『文鏡秘府論』を校勘した経験に基づく文章がある¹⁴。鈴木が校勘に用いたのは、『東方文化叢書』で影印された宮内省所蔵本ではなく高山寺本だったが、彼らが『文鏡秘府論』の解説者に相應しいと思われたのも當然だと言える。ただ、元々関心があったからこそ、影印の対象とするよう内藤らが提言したとも考えられるのではないか。狩野と共に内藤は古書複製事業の委員であったから¹⁵、それは可能だったはずだ。解説・校勘記の執筆を含めて、京都研究所の構成員が抱く興趣は、『東方文化叢書』に大きく反映したものであろう。

三、漢籍古寫本の複製と共同研究

『東方文化叢書』と異なり、東方文化學院京都研究所が獨自に刊行・販賣した、日本古寫本と關わる書籍は、『大唐大慈恩寺三藏法師傳』¹⁶一種に止まる。また古鈔本の影印として市販に供されたのは、東京研究所（東方文化學院の名稱を單獨で使い續ける）から分離した京都研究所が東方文化研究所に改組された翌年（1939年）に公刊した『古文尚書』¹⁷だけでしかない。しかしこの事實は、京都の研究所での日本古鈔本への関心が薄れたことを意味しない。六つ設けられた共同研究室の一、經學文學研究室の活動を見れば、それは分かる。

評議員らを除いて、發足時には八名の研究員・助手しかいなかった東方文化學院京都研究所だが、人員は漸増して副研究員や囑託員を含めて約三十名の研究者が勤務するようになっていく。彼らは共同研究室に分屬し、各種の共同研究に關與した。『尚書』の正文・注疏について定本の作成を目指した經學文學研究室では、昭和十年（1935）に日本古鈔本を含む、關連資料の収集が始まる。同年十一月、京都研究所の評議員だった新村出（1876～1967）が内野五郎三（1873～1934）、號は皎亭、と生前に結んだ友誼を傳手に、同研究室の研究員吉川幸次郎（1904～1980）、

¹²古鈔本文鏡秘府論（1930）。この後、1937年までかけて『東方文化叢書』は刊行された。

¹³東方學報（1931b）233頁、東方學報（1936a）823頁。

¹⁴内藤虎次郎（1969）61-88頁、鈴木虎雄（1923）。

¹⁵東方學報（1934）435頁。

¹⁶大唐大慈恩寺三藏法師傳（1932）。日本古鈔本をも用いた校勘は宇都宮清吉が擔當。

¹⁷本文で後に述べる實業家・收藏家の内野五郎三舊藏本を影印した古文尚書（1939）。

同（京都帝國大學文學部助教授と兼務）倉石武四郎（1897～1975）、副研究員平岡武夫（1909～1995）らが東京に赴き、内野の子息から皎亭舊藏の隸古定尚書を撮影することを許された。實際の撮影は、研究所に務める寫眞家の羽館易（1898～1986）が行った。先に觸れた『古文尚書』（注17）は、この際の寫眞を用いた影印である。以上の経緯は、影印本に附す吉川の跋文¹⁸に據る。京都研究所で寫眞が製本され、次にその影照本が京都帝國大學文學部や東方文化學院東京研究所に贈られ（各々の後身に現存¹⁹）、更に需要があったものか影印本が出版されたい。校訂に用いる資料の探索は、なお續く。

後に公刊されたこの共同研究の成果に冠する序に、校勘に用いられた資料が列挙される。うち既存の影印・影照本ではなく、京都研究所が獨自在撮影した日本傳存の舊鈔本『尚書』は内野本を除くと、觀智院本、清原宣賢手鈔本（當時は徳富猪一郎、京都帝國大學、東京文理科大學、蜷川第一が分藏）の二種（五點）である。だが他にも足利學校遺蹟圖書館に藏せられる鈔本を校勘に用いているし²⁰、藤田平太郎古梓堂文庫藏『尚書正義』影宋鈔本（一部）の影照が京都大學人文科學研究所に現存する。これらは昭和十一年（1936）から翌年にかけて、製本・架藏された²¹。古鈔本を含む資料が矢継ぎ早に見出された様子が窺われる²²。

『尚書』の共同研究が一段落した後の昭和十六年（1941）四月、經學文學研究室で『毛詩正義』の校定が始まる。この成果は未刊に終わるが（青焼き草稿を部分的に京都大學大學院文學研究科圖書館が所藏）、資料の博搜は『尚書』を扱った際に等しい。即ち京都研究所評議員の小島祐馬（1881～1966）が藏した單疏本（第四節参照）や九條本（次の段落で言及）²³、秘府（宮内省圖書寮）本（『和泉式部集』の紙背）、足利學校遺蹟圖書館本、龍谷大學圖書館本、京都帝國大學圖書館本（清原宣賢の奥書を有する）、靜嘉堂文庫本（一部）等の舊鈔經注本を研究所が撮影し、清原宣賢手鈔本（古梓堂文庫藏）を借覽して資料に用いた²⁴。

¹⁸ 吉川幸次郎（1968）284、286頁に新村重山（新村出）、内野皎亭の名が見える。

¹⁹ 京都大學文學部（1959）4頁、東京大學東洋文化研究所（1973）16頁に著録される。

²⁰ 以上、尚書正義定本（1939）巻首「尚書正義定本序」に據る。

²¹ 東方文化學院京都研究所（1936）1頁、東方文化學院京都研究所（1938）7頁、東方文化研究所（1941）1頁にこれらの影照本は著録されており、架藏された時期が分かる。

²² なお尚書正義定本（1939）巻首「尚書正義定本序」に清原宣賢手鈔本『尚書』について「今分藏四處」として徳富猪一郎などの所藏者を挙げた後、「京都神田氏尚有二卷未見」と述べる。その一方で尚書正義定本（1939）を重印した尚書正義定本（1945）巻首「尚書正義定本序」では同じ箇所を改めて「京都神田氏有卷六卷九〔中略〕皆用本所景本」と記しており、『尚書正義定本』を刊行し始めた後も、資料の収集を續けた様が窺える。

²³ 東方文化研究所（1941）1頁の著録に據れば、小島本と九條本の架藏はそれぞれ1937年、1938年だと分かる。

²⁴ 吉川幸次郎（1970）450、459-461頁。

こういった寫本の撮影は、どのように實現したのか。内野本『古文尚書』を複製した経緯は、既に本節で述べた。ここでは、別の例を挙げておこう。昭和十二年（1937）七月、京都研究所囑託員の新美寛（1905～1945）は東京方面に出張して、尊經閣文庫や足利學校遺蹟圖書館の他、九條家（五攝家の一）の當主、公爵九條道秀（1895～1961）を訪問している。同年十月五日には九條が東方文化研究所に來訪、翌年四月には吉川幸次郎が研究所寫真係の高橋猪之介（1911～1996）を伴って東京の九條家を訪ね、後に『毛詩』の校訂で用いる同家所藏の『毛詩鄭箋』、並びに『文選』を撮影した²⁵。新美は遺著²⁶に結實する研究（第四節で觸れる）の資料を求めて、九條家に赴いた。その作業の過程で同家所藏の古鈔本を複製する希望を提起し、當主が東方文化研究所を訪れるなどした中で交渉がまとまり、吉川らが訪問して撮影に至った——このように考えることは、可能ではあるまいか。

東方文化學院京都研究所や東方文化研究所の構成員は如何なる経路で、これら古寫本の所在を知ったのだろうか。古社寺や九條家などの舊家が古い鈔本を持つことは、容易く想像できる。それら以外の情報にも、神経を研ぎ澄ましていたのだろう。また、情報は時に所外からもたらされた。昭和十一年（1936）十一月二十・二十一日に京都研究所では東北帝國大學法文學部教授の武内義雄を招いて、「隸古定尚書に就いて」と題する連続講演會が開かれた²⁷。その場では『尚書』の寫本（複製）が陳列されたが、京都研究所は先に名を挙げた觀智院本と内野本しかまだ撮影できていない中、別に武内個人が所藏する影照本が五點（敦煌本三點、日本古寫本二點）も出陳されていた²⁸。これらは複製を重ねて京都研究所に架藏されたが²⁹、同時に彼から舊鈔本の情報が得られたことは想像に難くない。

あるいは舊鈔本が所員の元に持ち込まれる事例もあった。昭和十年（1935）夏頃に購入した手鑑の中に漢籍古寫本の斷片を見出した里見忠三郎（京都在住の古美術商）は、翌年の十一月頃、神官で有職故實家の出雲路通次郎（1878～1939）に鑑定を依頼した。出雲路は「其の書風平安末期に屬すべき」こと、「文選の注の斷片ならん」ことを見抜き、「此の珍物あるを京都帝國大學の誰氏にか告げんと念ひ居らるゝこと月餘、偶々大學の北門に君山狩野先生に逢」い、これを告げると狩

²⁵東方學報（1938）398、402、403、417頁。

²⁶新美寛・鈴木隆一（1968a）、新美寛・鈴木隆一（1968b）。

²⁷武内義雄（1979）372-394頁に講演録を収める。

²⁸東方學報（1936b）397-400頁。

²⁹東方學會（2000a）204頁で吉川幸次郎が、武内義雄について「私はそのころ、東方文化研究所で『尚書』の校訂をしておりましたが、大變たくさんの資料を惜しみなくいただきました」、「今でも感謝いたしております」と語っている。なお武内から贈られた舊鈔本『尚書』の複製は、東方文化學院京都研究所（1936）1頁、東方文化學院京都研究所（1938）7頁にそれぞれ「武内義雄先生捐」、「武内義雄君捐」と注記して著録される。

野（號は君山）は『文選集注』の斷簡ではないかと思ひ、「踵を返して出雲路氏宅に就きて之を觀るに、果哉文選集注」卷六十一の一部であった³⁰。

これなどは狩野が羅振玉（1866～1940）の援助を受けて、大正十一年（1922）に『京都帝國大學文學部景印唐鈔本第一集』³¹を公刊した他、日本古寫本を用いた論考を著していたからこそ、情報が届いたものだろう。『文選集注』卷六十一の斷簡は、第二集³²以降、『京都帝國大學文學部景印舊鈔本』と名を改めた同じ叢書の第九集³³に影印が收められた。その名のとおり、この叢書は京都帝國大學文學部から刊行されていたが、斷簡の發見された先述の經緯が『東方學報（京都）』（京都研究所の紀要）に掲載された點（注30）にも示される如く、京都研究所・東方文化研究所とも關係があった。例えば第十集³⁴には、大念佛寺（大阪市）所藏の『毛詩傳箋』が影印されている。それは第十集が刊行された前年、昭和十六年（1941）五月十九日、吉川と平岡武夫が出張して、撮影した³⁵同寫本の寫眞に基づくようだ。

外務省（後には興亞院³⁶）傘下の東方文化研究所が撮影した寫本の影印が、文部省の管轄下に在る京都帝國大學の刊行する叢書に收められたことを、奇妙に思われる向きがあるかもしれない。だが狩野ら東方文化研究所の指導者は退休・現職の差こそあれ同大學の教授で、研究員たちは概ねそこで彼らに學んだ經驗を持つ。いずれの發案・豫算かという點に、師弟たる両者はそうこだわっていなかったのではないか。ともかく、『京都帝國大學文學部景印舊鈔本』での材料の選擇・撮影に、京都研究所・東方文化研究所も関わっていたと思ひい。

經部・集部の書ばかり擧げたので、經學文學研究室だけが當該の活動に熱心だったと思われるかもしれない。だが東方文化學院京都研究所における舊鈔本の複製は、實は別の分野で始まった。尊經閣文庫所藏の『天文要錄』、『天地瑞祥志』の鈔寫は昭和七年（1932年）のことであった³⁷。これは昭和六年（1931）に發注されており、研究所の評議員で天文曆算研究室の構成員を指導した新城新藏（1873～1938）の助言で入手されたと考えるべきようだ³⁸。

同じ昭和七年（1932）に、『大唐韶州雙峯山曹溪寶林傳』（原本は京都青蓮院所

³⁰新美寛（1937）310-311頁。

³¹京都帝國大學文學部（1922）。

³²京都帝國大學文學部（1935）。前注所掲の第一集から十三年を経て、この第二集は刊行された。あるいは東方文化學院京都研究所（1929年に創立）という新たな研究機關の責任者の地位に就いたことが、狩野にとって刊行を再開する動機の一つだったのだろうか。

³³京都帝國大學文學部（1942a）。

³⁴京都帝國大學文學部（1942b）。

³⁵東方學報（1941）171頁。

³⁶東方學報（1941）169頁に據れば、1941年5月1日に興亞院へ移管された。

³⁷兩書の複製は東方文化學院京都研究所（1934）62頁に著録される。

³⁸水口幹記（2005）187-189頁、武田時昌（2007）5頁に考證が見られる。

藏)が影照されている。『寶林傳』と略稱されるこの禪宗史書は佚書だったが、東方文化學院東京研究所研究員の常盤大定(1870~1945)が青蓮院で同年十一月十四日に卷六を發見し、彼から依頼された京都研究所宗教研究室研究員の塚本善隆(1898~1980)の働きで撮影に至った。常盤はやがて影印を世に出すが³⁹、元の寫眞を用いた影照本も京都研究所に架藏された⁴⁰。なお、この他には昭和九年(1934)に『韻鏡』(京都三寶院所藏)の影照本も作られた⁴¹。

ここで挙げた『天文要録』等の鈔寫に示される尊經閣文庫こと育徳財團(舊加賀藩主前田家所藏の古典籍などを収める)との関係があつてのことだろうが、昭和十二年(1937)九月、吉川幸次郎が同文庫や宮内省圖書寮などに足を運び、歸洛の後、『玉燭寶典』尊經閣本・圖書寮本等の差異を、東方文化學院京都研究所内の談話會で報告している⁴²。吉川の『玉燭寶典』に對する興味は、年中行事に関わる記述が『禮記』「月令」等の校勘に資することに在つたようだ。このことは、侯爵前田家育徳財團(育徳財團を改稱)が刊行した同書の影印本のために彼が著した解題⁴³より窺われる。その執筆は、新村出と法學者で育徳財團の初代理事長清水澄(1868~1947)⁴⁴からの依頼によるという⁴⁵。實物を知る者に解題の執筆を頼めるのは、閱覽を認めればこそであり、舊鈔本の所藏者にも、京都研究所と交流を持つ利點があつたと言えよう。

東方文化學院京都研究所・東方文化研究所が撮影した漢籍舊鈔本は、前掲の諸例に止まらない。京都大學人文科學研究所が所藏する複製に限つても、架藏された年の順に昭和十一年(1936)の『古文孝經』(賀茂別雷神社)、『孝經』(高野山寶壽院)、『文選』殘卷(東寺觀智院)⁴⁶、十三年(1938)の『文選』殘卷(大阪・上野精一)⁴⁷、十六年(1941)の『周易』二點(足利學校遺蹟圖書館)、十七年(1942)の『五行大義』(神宮文庫)の影照本⁴⁸が知られる。書名の後の括弧内に示した當時の所藏者は、足利學校遺蹟圖書館(栃木縣足利市)を除けば、みな近畿地方の古社寺か収集家である。本節で先に觸れた九條家も、千年以上の間、京都で傳統を育てていた。また上野家は嘗て内藤が勤めた朝日新聞社の社主を務める家系で、

³⁹發見・撮影の経緯は『寶林傳』卷六の影印を含む常盤大定(1934)2頁に據る。

⁴⁰東方文化學院京都研究所(1934)62頁に著録される。

⁴¹東方文化學院京都研究所(1936)3頁に著録される。

⁴²東方學報(1938)402、411-412頁。

⁴³侯爵前田家育徳財團(1943)別冊、のち吉川幸次郎(1968)552-557頁。執筆に際して新美寛の助力や新村重山(重山は新村出の號)の示教を得たと末尾に記される。

⁴⁴太平洋戦争前の育徳財團やその清水澄との関係は菊池紳一(2016)37-47頁参照。

⁴⁵吉川幸次郎(1968)「第七卷三國六朝篇自跋」596頁。

⁴⁶以上三種は東方文化學院京都研究所(1938)16、722、248頁に各々著録される。

⁴⁷東方文化研究所(1941)38頁に著録される。

⁴⁸以上二種は京都大學人文科學研究所(1963)4、536頁に各々著録される。

戦後（1950年）に甲骨の一大収集を人文科学研究所に寄贈するなど、京都の中国学者との友誼は深い⁴⁹。

經書や『文選』に混じって、ここに書名が見える『五行大義』は、久邇宮家藏本が『東方文化叢書』での影印の対象に擬せられていたが⁵⁰、結局は実現しなかった。東方文化研究所は、久邇宮家藏本を轉寫した神宮文庫本を撮影したのである⁵¹。これより先、昭和十四年（1939）九月十一・十二日に東方文化研究所研究員の能田忠亮（1901～1989）、十二月十・十一日に能田と同じく研究員の藪内清（1906～2000）が神宮文庫の在る宇治山田（現伊勢市）に出張した記録が傳わる⁵²。所屬する天文曆算研究室の業務による資料の調査を通じて彼らは神宮文庫と交流を持ち、それが三年後の『五行大義』の撮影につながったのだろう。

複製ならぬ實物としては、狩野直喜が亡友富岡謙藏（1873～1918）遺愛の古寫本『周易正義』を得て、東方文化研究所に寄贈している⁵³。他にも研究所は竹苞樓（京都市の古書肆）から、舊鈔『論語』零片を購入した⁵⁴。これらを思えば、京都という研究所の所在地や所員の人脈が、資料の収集で有利に働いたことが見て取れる。要するに、いま確かめ得る範囲だと昭和七年（1932）から十七年（1942）まで、東方文化學院京都研究所・東方文化研究所は漢籍古寫本の複製を續けていたと考えられる。

四、京都研究所構成員の中國典籍日本古寫本への見方

それでは、前身から續く東方文化研究所による日本舊鈔本の博搜は、所外における中國學の研究に影響を及ぼしたのだろうか。文選學の大家として知られる斯波六郎（1894～1958）が恐らくは吉川との關係（京都帝國大學文學部で共に狩野直喜・鈴木虎雄から中國文學を學び、1926年に卒業した同級生⁵⁵）で上野本『文選』の複製（注47）を手に入れている⁵⁶。東方文化研究所が同書を撮影した時期、斯波

⁴⁹ 上野淳一（1976）、貝塚茂樹（1960）4-11頁参照。

⁵⁰ 東方學報（1931c）295頁、東方學報（1934）435頁。

⁵¹ 長澤規矩也（1973）56-57頁参照。長澤は「戦前は、原本が宮家の舊藏で、民間人はこの書によつて原本を窺ひ知る以外術がなかつた為、この書の價値は非常に高かつた」と述べる。

⁵² 東方學報（1939b）131頁、東方學報（1940）147頁。

⁵³ 狩野が『周易正義』に記した跋文は東方學報（1939a）155頁に翻刻・収録されるが、末尾に「昭和十三年四月」とある。同書は東方文化研究所（1941）1頁に著録される。

⁵⁴ 東方文化研究所（1941）3頁に著録される。なお京都大學人文科学研究所に傳わる當該『論語』零片の圖書カードに「佐々木惣四郎」（竹苞樓の店主の姓名）と記される。

⁵⁵ 斯波の經歷・學問については東方學會（2000b）71-100頁に詳しい。

⁵⁶ 斯波の舊藏書として、廣島大學附屬圖書館（1999）66頁に東方文化學院京都研究所、東方文化研究所がそれぞれ撮影した『文選』觀智院本と上野本の複製が著録される。

は広島文理科大学助教授兼広島高等師範学校教授だった。彼が後に上野本の眉批をも用いながら、『文選』の編纂に劉孝綽（481～539）が主導的な役割を果たしたという新たな知見を示した⁵⁷ 事實は、既に述べたことがある⁵⁸。しかし、これは一つの例外に過ぎない。ほとんどの影照本は東方文化學院京都研究所や東方文化研究所における内部資料でしかなく、その存在は戦時中を挟んでほぼ忘れ去られる。

小島祐馬舊藏の『毛詩正義』「秦風」單疏本を例にとろう。この單疏本は早くより七つの残片を伝えるのみだが、うち富岡謙藏が四片、小島が二片、後に天理大學附屬天理圖書館が一片⁵⁹を所藏するようになった。吉川は富岡舊藏・小島所藏の残片を「果たして唐人の手に出るか、乃至はわが奈良朝人の手に出るかは、充分に定め難い」⁶⁰と稱する（唐鈔本と概ね考えられている點は、いま問わない）。内藤が小島の所有する残片を目睹したと述べる文章の初出⁶¹から考えて、入手は昭和四年（1929）以前で、『毛詩正義』の校訂に用いるべく同十二年（1937）に京都研究所が影照本を作成する（注23）。小島自身は論著でこれに一度も言及せず、京都帝國大學文學部教授の職を停年で退いた（1940年）後は、郷里の現高知市で中國社會思想史と中國革命の形勢に關する著述と農耕などに勤しんだ（1941～1966）⁶²。

阿部隆一（1917～1983）の手に成る日本舊鈔本のリストは、現物の所在が不明の場合も影印本の情報等に據って鈔本の存在を記すなど、昭和三十年代後半の成果ながら網羅的なことで知られる。それでさえも、元は一連の卷子に含まれ後に分斷した『毛詩正義』の富岡舊藏寫本と天理圖書館藏品を著録するが、小島所藏の斷片には言及するところが無い⁶³。かくて『京都帝國大學文學部景印唐鈔本第一集』（注31）にも収める富岡舊藏本（現在は京都市が所藏）が重要文化財に指定されたのに對して、小島鈔本の方は知る人も稀なままだった⁶⁴。小島の逝去から十五年を経た昭和五十六年（1981）夏、その舊藏文書類の中から見出され、遺族が藏書と共に高知大學へ寄贈するまで（現在は同大學學術情報基盤圖書館が所藏）、この状態が續く⁶⁵。原本にして然り、影照本の方に言及する文獻など皆無に近いと言える⁶⁶。

このことは、昭和四十年（1965）四月に附屬東洋學文獻センター（現東アジア人

⁵⁷ 斯波六郎（2004）7-8頁。この見解を示した當時の斯波は広島文理科大学教授だった。

⁵⁸ 永田知之（2015）。

⁵⁹ 天理圖書館（1960）47頁に著録、天理圖書館（1968）第三葉に寫眞が掲載される。

⁶⁰ 吉川幸次郎（1970）450頁。

⁶¹ 内藤虎次郎（1970）203頁、初出は1929年。

⁶² 岡村敬二（2014）159-230頁。

⁶³ 阿部隆一（1993）215頁。

⁶⁴ 小島舊藏の『毛詩正義』をめぐる事實は西脇常記（2016）63-81頁に依據した。

⁶⁵ 松田清（1999）36頁。

⁶⁶ 例外的に中田勇次郎（1981）193頁に見える文獻目録の中にこの影照本が挙げられる。

文情報學研究センター)が設置されるまで、人文科學研究所やその前身が藏する漢籍は外部に非公開だった點とも關わろう。確かに、所外の研究者にも閱覽の便宜を圖る場合はあった。東洋學文獻センターが設けられる前だが、中村璋八(1926～2015)は神宮文庫本『五行大義』のマイクロフィルムを利用している⁶⁷。また時期は分からないが、太田晶二郎(1913～1987)は人文科學研究所が所藏する尊經閣文庫本『天地瑞祥志』、『天文要録』の複製を目にしたと知られる⁶⁸。そこで得られた知見は、大なり、小なり、これらの學者の論著に生かされた。

だが、こういった例はそう多くない。東方文化學院京都研究所やその後身が編んだ歴代の漢籍目録に古寫本の影照は著録されていても、昭和四十年代まで部外者にとってそれらの利用はやはり難しかった。しかし、そればかりがこのような影照本の存在が知られなかった原因ではなかろう。より大きくは稀見の書を無闇と重視しない、研究所に勤めるスタッフの姿勢がそこに介在したと思われる。

確かに、天文曆算研究室では『天文要録』などの稀觀本を、先述のとおり早く(1932年)に複製していたし(注37)、同時期に新美寛らもそういった成果物を利用し始めていた⁶⁹。だが前者は歴史がなお浅い中國科學史の研究に用いる基礎資料を集める一貫としての複製であった。中村璋八や太田晶二郎が後にこれらの複製やマイクロフィルムを閱覽したのも(注67、68)、他に所藏の稀な資料だったからである。また、新美にしても日本傳存の文獻から漢籍の佚文を探す調査の過程で古寫本を用いたのだった。好事家ならぬ東方文化學院京都研究所の構成員にとっては當然のことだが、舊鈔本とは研究上の資料でしかなかった。これは逆に言えば、資料としての使用を離れば、かかる寫本や複製を持つことを聲高に述べ立てないことを意味する。經學文學研究室に至っては、この傾向がより著しかった。

中國のみならず各國で蓄積に富むこの分野では、『尚書正義』の校訂が典型だが、古鈔本は通行の刊本を糾す、具體的には宋版より古典の原型になお近い資料として、まず價值を持った。次に、吉川の講演録から一部を引いておく(講演の日付は昭和十二年⁷⁰十一月二十日)。彼は日本傳存の舊鈔『禮記正義』が校勘に甚だ資す

⁶⁷中村璋八(1976)247頁に據れば、中村は「昭和二十七・八年の頃、度々、京都大學人文科學研究所を訪れ、」平岡武夫より「研究所に五行大義鈔本のマイクロが藏せられていることを教えられ、それと現行本との校合を夜晩くまで、」平岡の研究室で行い、また新美寛の佚書・佚文収集のカード(注26に擧げる著作の基礎作業)を鈔寫した。なお彼は人文科學研究所にある『天地瑞祥志』の複製も利用している。中村璋八(1985)480頁。

⁶⁸太田晶二郎(1991)170頁注77参照。

⁶⁹新美寛・鈴木隆一(1968a)「凡例」、新美寛・鈴木隆一(1968b)の鈴木隆一「跋」4頁。

⁷⁰東方學報(1938)403頁に「十三年」とあるのは誤り。『東方學報(京都)』の當該冊が昭和十三年十月に刊行されており、またこれは京都研究所の第九回開所記念日講演だが、當時は昭和四年から足掛けで回數を稱えていたので、昭和十二年が正しいと判断される。

ること、同様の資料が敦煌文獻を除くと中國では皆無に近いことを説きつつ、注意すべき事柄の第三點としてこう述べる。

而うして燉煌のものは暫く舎き、其の我國に存します資料に就いては、之れを利用し研究するのに最も便利な地位に居りますのは、申す迄もなくわれわれ日本人であります。これは獨り地理的にそうであるばかりでなく、此等の資料の中には、其の支那語で書かれた本文が役に立つ以外に、之れに附加された乎古止點其他、國語の翻譯の部分が、支那語の本文と相助けて、古いテキストの形なり古い意義なりを證明する場合も、あまり多くはないが有るのでありまして、かかる條件からも亦然るのであります。即ちかかる資料を利用することはわれわれ日本の支那學者の特權である、特權であると共に又義務である、義務の全部ではありませんが其の一部であると考えます。所で鈔本の貴ぶべきことは、夙に諸先輩、ことに京都の諸先輩の唱道された所でありませんが、其の唱道の割には之れを研究することは未だ充分に行われて居らぬ様であります。只だ複製を作つて大切にするだけでは何にもなりません。之を研究せねばならぬ。此の點に關して更に皆様の注意を喚起したいというのが、其の三つであります⁷¹。

恐らくは内藤や狩野を主とする「京都の諸先輩の唱道」が、吉川のような次世代の研究者をして中國典籍日本古寫本に着目せしめた事實、並びに日本人がその研究に攜るべきだという主張を、ここに引いた言葉は餘すこと無く傳える。その中には吉川を初めとする人々が従事した『尚書正義』⁷²及び『毛詩正義』の、また吉川個人による『禮記注疏』「曲禮」の校勘⁷³を経験したことによる實感も込められていよう。同時に書目への著録や題跋の執筆、資料の複製に終始しがちだった過去の學者を超え、研究の材料として活かしてこそ舊鈔本は意味を持つという考えもそこには含まれる。古鈔本への向き合い方を問い、ひいては1930年代後半の京都にこういった意識を持つ學者が存在した意味で、興味深い言辭と言えよう。

⁷¹吉川幸次郎（1970）444-445頁。

⁷²第三節で論及した『尚書正義定本』の出版に先立って、その校勘の記録が『東方學報（京都）』に部分的に掲載され、いま吉川幸次郎（1975）257-597頁に收められる。

⁷³吉川幸次郎（1975）598-667頁に「昭和十二年三月」と時期を記す序を冠した校勘記を收める。なお「禮記注疏曲禮篇補校 吉川幸次郎研究報告」と題するこの校勘記の青焼き草稿が京都大學大學院文學研究科圖書館に所藏される。

五、おわりに

昭和二十四年（1949）四月、東方文化研究所は京都大學人文科學研究所の一部となった。新しい研究所においても、日本古寫本を利用した研究を續ける例はあり、殊に『白氏文集』の會讀を主題とする共同研究班に集った研究者は、その典型だった。當該の研究班で班長を務めた平岡武夫は、戦前に内野本『古文尚書』の複製（第三節、注18）に加わった經驗を持つ。自身も乾板による撮影に攜わった、當時の苦心を回想して、平岡はこう述べている。

それで、一日に二十枚も撮れたら嬉しいんです。しかし、毎日、その家に行ってお邪魔するのが氣の毒で、氣が氣ではないんです。[中略]そこで、僕は校勘するのに字が讀めたらいいんで、「早う寫してくれ」言うたら、技師が怒りましてね。「私は本を寫すんだ。本の中で字がこうゆうふうになつとるのを寫すんだ。だから、それで嫌なら俺は寫さん。あんたが勝手に寫せ！」とストライキやられましてね。一面、困りましたけれど、「アアなるほど、仕事というものはこうゆうふうにするべきものなのか」という教訓を得ました。文字の異同は、字の格好が違ごうていることを識別するばかりでなしに、本の中における文字がどうかということ、その文字を本の中に見なければいけない、決して時間ばかり急いではいけないんだということを教えられました。

これは、今日初めて言うことですがけれども、その本をのちに本屋を通して、あるところが買ったんですよ。ところが、その本の値段はね、僕らが寫眞に使うた費用より安いんですよ。それで、倉石先生が、「これは言わずにおきましょう」と言われまして…（笑）⁷⁴。

撮影（1935年10月）からこの談話（1991年8月25日）まで半世紀以上を経ているので、あるいは證言者の記憶違いなども含まれるかもしれない。だが、それにしても東方文化學院京都研究所が潤澤な資金⁷⁵、職人氣質の優れた專屬の寫眞家⁷⁶を擁し、書物についての教訓を得る機會をまだ若い研究者に結果として與えていたことは、ここから窺えよう。これほどまでに恵まれた環境は得られないにせよ、二十世紀後半における京都大學人文科學研究所の中國學者も、中國典籍日本古寫

⁷⁴平岡武夫（1994）40-41頁。「その家」は、『古文尚書』を所藏した内野家を指す。

⁷⁵内野五郎三舊藏書の賣り立てで、『古文尚書』は2102圓で落札され、靜嘉堂文庫の有に歸した。反町茂雄（1986）198-200頁參照。平岡の談話を信じれば、京都研究所は同じ鈔本の撮影にこれを上回る經費を支出したことになる。

⁷⁶この際の撮影を擔當した羽館易（引用中の「技師」）について、平岡は「非常に眞面目で、腕もしっかりしている人です」と述べる。平岡武夫（1994）42頁。

本などのより古い資料を用いて優れた研究業績を上げ続けた。しかし、その一方で研究の資料としての役割を終えた舊鈔本の複製が時間と共に存在を忘れ去られる傾向も、太平洋戦争の前後でそうは変わらなかった。つまるところ、京都の中國學徒はどこまで行っても研究者であって、好事家ではあり得なかったのである。

今日では影印本やデジタルアーカイブ等を通じてより鮮明な畫像が見られるので⁷⁷、人文科學研究所に残る日本古寫本を複製した影照本の相當數は、資料としての役目を終えたと言えよう。しかし『尚書正義』のような形を取らずとも、その前身組織で漢籍古寫本の複製が研究の材料として重要な意味を持った點は争えない。かかる學術史の一齣を知るよすがとして、大方の記憶から失われたそれらの複製について述べた次第である。(文中敬稱略)

参考文献一覧

(著者名等の後の括弧で括った數字はその論著の發表・出版年を意味する)

阿部隆一(1993):「本邦現存漢籍古寫本類所在略目録」、阿部隆一著、慶應義塾大學附屬研究所編纂『阿部隆一遺稿集 第1卷 宋元版篇』(汲古書院)

上野淳一(1976):「内藤湖南先生と上野三代」、内藤虎次郎『内藤湖南全集』14(筑摩書房)「月報」

太田晶二郎(1991):『太田晶二郎著作集』1、小論關連部分は「『天地瑞祥志』略説——附けたり、所引の唐令佚文」として『東京大學史料編纂所報』7(1972年)に初出。

岡村敬二(2014):『京大東洋學者 小島祐馬の生涯』(臨川書店)

貝塚茂樹(1960):『京都大學人文科學研究所藏甲骨文字 本文篇』(京都大學人文科學研究所)

狩野直喜(1980):『讀書纂餘』(みすず書房)

菊池紳一(2016):『加賀前田家と尊經閣文庫——文化財を守り、傳えた人々』(勉誠出版)、小論關連部分は「前田利爲侯の文化事業」として石川縣立美術館編集『前田利爲と尊經閣文庫』(石川縣立美術館編集、1998年)に初出。

舊鈔卷子本莊子殘卷校勘記(1932):『舊鈔卷子本莊子殘卷校勘記』(東方文化研究所)

京都大學人文科學研究所(1963):『京都大學人文科學研究所漢籍分類目録』上(京都大學人文科學研究所)

京都大學人文科學研究所(1979):『人文科學研究所50年』(京都大學人文科學研究所)

⁷⁷例えば第四節で觸れた小島祐馬舊藏『毛詩正義』の殘片の場合、高知大學附屬圖書館(1987)の口繪にその彩色圖版が掲載されている。

- 京都大學文學部（1959）：京都大學文學部編輯『京都大學文學部漢籍分類目錄 第一』（京都大學文學部）
- 京都帝國大學文學部（1922）：京都帝國大學文學部編『京都帝國大學文學部景印唐鈔本第一集』（京都帝國大學文學部）
- 京都帝國大學文學部（1935）：京都帝國大學文學部編『京都帝國大學文學部景印舊鈔本第二集』（京都帝國大學文學部）
- 京都帝國大學文學部（1942a）：京都帝國大學文學部編『京都帝國大學文學部景印舊鈔本第九集』（京都帝國大學文學部）
- 京都帝國大學文學部（1942b）：京都帝國大學文學部編『京都帝國大學文學部景印舊鈔本第十集』（京都帝國大學文學部）
- 經籍訪古志（2014）：[日] 澁江全善・森立之等撰、杜澤遜・班龍門點校『經籍訪古志』（上海古籍出版社）
- 侯爵前田家育德財團（1943）：侯爵前田家育德財團編輯『玉燭寶典』（侯爵前田家育德財團）
- 高知大學附屬圖書館（1987）：高知大學附屬圖書館編『小島文庫目錄』（高知大學附屬圖書館）
- 古鈔本文鏡祕府論（1930）：『古鈔本文鏡祕府論』（東方文化學院）
- 古文尚書（1939）：東方文化研究所編『古文尚書』（東方文化研究所）
- 斯波六郎（2004）：『六朝文學への思索』（創文社）、小論関連部分は「昭明太子」として吉川幸次郎編、麗澤社編輯『中華六十名家言行録 青木正兒博士還暦記念』（弘文堂書房、1948年）に初出。
- 尚書正義定本（1939）：東方文化研究所經學文學研究室編『尚書正義定本 第1冊 虞書』（東方文化研究所）
- 尚書正義定本（1945）：東方文化研究所編『尚書正義定本 第一』（全國書房）
- 鈴木虎雄（1923）：「文鏡秘府論を校勘して」、『支那學』3-4
- 莊子雜篇（1930）：『莊子雜篇』（東方文化學院）
- 反町茂雄（1986）：『一古書肆の思い出 2 賈を待つ者』（平凡社）
- 大唐大慈恩寺三藏法師傳（1932）：東方文化學院京都研究所編輯『大唐大慈恩寺三藏法師傳』（東方文化學院京都研究所）
- 武内義雄（1978）：『武内義雄全集 第6卷 諸子篇 1』（角川書店）、小論関連部分は「莊子攷」として『藝文』9-8（1918年）に初出。

- 武内義雄（1979）：『武内義雄全集 第3卷 儒教篇2』（角川書店）、小論関連部分は「隸古定尚書に就いて」として『支那學』8-3（1936年）に初出。
- 武田時昌（2007）：「新城新藏博士の迷信研究——『大唐陰陽書』購入餘話」、『漢字と情報』14
- 天理圖書館（1960）：天理圖書館編輯『天理圖書館稀書目録 和漢書之部 第三』（天理大學出版部）
- 天理圖書館（1968）：天理圖書館編輯『古冊殘葉』（天理大學出版部）
- 唐過所（1935）：『唐過所』（東方文化學院）
- 東京大學東洋文化研究所（1973）：『東京大學東洋文化研究所漢籍分類目録』（東京大學東洋文化研究所）
- 唐鈔本（1981）：中田勇次郎監修、大阪市立美術館編『唐鈔本』（同朋舎出版）
- 東方學報（1931a）：「彙報・東方文化學院京都研究所開所記念講演會」、『東方學報（京都）』1
- 東方學報（1931b）：「彙報・古書複製事業の概況」、『東方學報（東京）』1
- 東方學報（1931c）：「彙報・今年度古書複製事業」、『東方學報（東京）』2
- 東方學報（1934）：「彙報・古書複製事業概況」、『東方學報（東京）』5
- 東方學報（1936a）：「彙報・古書複製事業第一期完了」、『東方學報（東京）』6
- 東方學報（1936b）：「彙報・連續講演會」、『東方學報（京都）』7
- 東方學報（1938）：「彙報」、『東方學報（京都）』9
- 東方學報（1939a）：「本所善本提要」、『東方學報（京都）』10-1
- 東方學報（1939b）：「彙報・所員出張竝に留學」、『東方學報（京都）』10-3
- 東方學報（1940）：「彙報・所員出張」、『東方學報（京都）』11-1
- 東方學報（1941）：「彙報」、『東方學報（京都）』12-1
- 東方學會（2000a）：財團法人東方學會編『東方學回想IV 先學を語る（3）』（刀水書房）、小論関連部分は「先學を語る 武内義雄博士」として『東方學』58（1979年）に初出。
- 東方學會（2000b）：財團法人東方學會編『東方學回想V 先學を語る（4）』（刀水書房）、小論関連部分は「先學を語る 斯波六郎博士」として『東方學』61（1981年）に初出。
- 東方文化學院京都研究所（1934）：吉川幸次郎・渡邊幸三・笠原仲二・倉田淳之助校『東方文化學院京都研究所漢籍簡目 昭和九年七月初訂』（東方文化學院京都研究所）

- 東方文化學院京都研究所（1936）：吉川幸次郎・渡邊幸三・玉貫公寛編『東方文化學院京都研究所新增漢籍目錄 昭和九年八月至十一年二月』（東方文化學院京都研究所）
- 東方文化學院京都研究所（1938）：『東方文化學院京都研究所漢籍目錄』（東方文化學院京都研究所）
- 東方文化研究所（1941）：『東方文化研究所續增漢籍目錄 昭和十二年九月至十六年二月』（東方文化研究所）
- 常盤大定（1934）：『寶林傳の研究』（東方文化學院東京研究所）、小論関連部分は「寶林傳の研究」として『東方學報（東京）』4（1933年）に初出。
- 内藤虎次郎（1969）：『内藤湖南全集』9（筑摩書房）、小論関連部分は『弘法大師の文藝』（六大新報社、1912年）として初出。
- 内藤虎次郎（1970）：『内藤湖南全集』7（筑摩書房）、小論関連部分は「影印祕府尊藏宋槧單本尚書正義解題」、「三井寺所藏の唐過所に就て」として内藤虎次郎著、大阪毎日新聞社編纂『影印祕府尊藏宋槧單本尚書正義解題』（大阪毎日新聞社、1929年）、桑原博士還曆記念祝賀會編纂『桑原博士還曆記念東洋史論叢』（弘文堂書房、1931年）に各々初出。
- 長澤規矩也（1973）：長澤規矩也編輯『神宮文庫漢籍善本解題』（神宮司廳）
- 中田勇次郎（1981）：中田勇次郎監修、大阪市立美術館編『唐鈔本』（同朋舎出版）
- 永田知之（2015）：「上野本『文選』殘卷に寄せて——『文選』讀書史斷想」、『中國典籍日本古寫本の研究 Newsletter』II
- 中村璋八（1976）：『五行大義の基礎的研究』（明德出版社）
- 中村璋八（1985）：『日本陰陽道書の研究』（汲古書院）、小論関連部分は「天文要録について」として『櫻美林大學 中國文學論叢』2（1970年）に初出。
- 新美寛（1937）：「新獲文選集注斷簡」、『東方學報（京都）』8
- 新美寛・鈴木隆一（1968a）：新美寛編、鈴木隆一補『本邦殘存典籍による輯佚資料集成』（京都大學人文科學研究所）
- 新美寛・鈴木隆一（1968b）：新美寛編、鈴木隆一補『本邦殘存典籍による輯佚資料集成續』（京都大學人文科學研究所）
- 西脇常記（2016）：『中國古典時代の文書の世界——トルファン文書の整理と研究』（知泉書館）、小論関連部分は「『毛詩正義』寫本殘簡について——消えたベルリンの1殘簡と日本に傳世する7殘簡」として『文化史學』67（2011年）に初出。
- 平岡武夫（1994）：「平岡武夫先生に聞く」、太田次男等編集『白居易研究講座 第5卷 白詩受容を繞る諸問題』（勉誠社）

廣島大學附屬圖書館（1999）：廣島大學附屬圖書館編集『廣島大學斯波文庫漢籍目錄』（廣島大學附屬圖書館）

松田清（1999）：松田清解説「小島祐馬舊藏「對支文化事業關係文書」、『所報人文』46（創立70周年記念號）

水口幹記（2005）：『日本古代漢籍受容の史的硏究』（汲古書院）

山根幸夫（2005）：『東方文化事業の歴史——昭和前期における日中文化交流』（汲古書院）

吉川幸次郎（1968）：『吉川幸次郎全集』7（筑摩書房）、小論關連部分は「舊鈔本古文尚書跋」、「玉燭寶典解題」として古文尚書（1939）、侯爵前田家育徳財團（1943）に各々初出。

吉川幸次郎（1970）：『吉川幸次郎全集』10（筑摩書房）、小論關連部分は「舊鈔本禮記正義を校勘して——第九回開所記念日講演」、經學文學硏究室（吉川幸次郎記）「毛詩正義校定資料解説」として『東方學報（京都）』9（1938年）、『東方學報（京都）』13-2（1943年）に各々初出。

吉川幸次郎（1975）：『吉川幸次郎全集』21、小論關連部分は「讀尚書注疏記」、「禮記注疏曲禮篇校記」で前者は經學文學硏究室の名義によって『東方學報（京都）』7（1936年）から11-4（1941年）までの11-3（1940年）を除く毎號に初出。

（作者は京都大學人文科學硏究所准教授）